

はじめに

『源氏物語』研究を開放したい、それが本書のねらいである。

日本の古典文学を代表するこの作品は、一〇〇〇年という途方もない時間の試練に堪え得たものだけに許される、きわめて分厚い研究の歴史を含有する。また、それは現在も止まることなく、陸続と新しい研究成果が公表され続けている。それゆえに、その研究史を、そして研究の現在を把握しなければ、『源氏物語』について論じることが困難になってしまっているように思われるのである。別の表現を借りるなら、『源氏物語』がそれを専門とする研究者の専有物になってしまっているということでもあろう。これは、この作品にとり、果たして幸福な事態と言えるのだろうか。

この際、専門外の研究者の参入を求めて、この事態を打開してみたいのである。

本書への執筆依頼を行うに際し、私はその趣旨を次のように述べた。

本書は、『源氏物語』研究を従来の『源氏物語』専門または中古文学研究者以外の国文学研究者に広く開放し（あるいは参画を促し）、新たな視点・方法・問題意識等を自由に導入することにより、『源氏物語』研究および作品世界を一層拡大・深化させる機縁とする。

そのために、各巻に一人の執筆者を充て、合計五四人の布陣をとることとしたのである。

各専攻時代および人数の当初予定は、上代文学八人、中世文学一二人、近世文学一二人、近代文学二二人であり、

各執筆者の担当する巻の選択は、ほぼアトラランダムに行った。また、文字数は担当巻の長短にかかわらず、各編四〇〇字詰原稿用紙換算二五枚を標準とした。

以下、本書の凡例をも兼ねて、執筆要領記載事項（一部修正）を列挙する。

- 一、論考に用いる『源氏物語』の依拠テキストは、次のどちらかとする。
 - （１）原文に校注（訳）を施したもの（次項の①②③）。
 - （２）近代の作家による現代語訳の代表的なもの（同④⑤⑥）。したがって、論考の内容は、依拠したテキスト内でのみ有効となる。『源氏物語』以外については、各自の判断によることとし、適宜テキスト名を記載する。
- 二、前項にいう依拠テキストとして、具体的に次の中から一つを選び、論考冒頭にそれを記載する。
 - ①新潮日本古典集成『源氏物語』一～八（新潮社）
 - ②新日本古典文学大系『源氏物語』一～五＋別巻（索引）（岩波書店）
 - ③新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館）
 - ④〈角川文庫〉与謝野晶子『全訳 源氏物語 新装版』一～五（角川書店／平成）
または〈角川文庫〉与謝野晶子『全訳 源氏物語』一～三（角川書店／昭和）
 - ⑤〈中公文庫〉谷崎潤一郎『潤一郎訳 源氏物語』巻一～五（中央公論新社／平成）
または〈中公文庫〉谷崎潤一郎『潤一郎訳 源氏物語』巻一～五（中央公論社／昭和）
 - ⑥〈新潮文庫〉円地文子『源氏物語』一～六（新潮社／平成）
または〈新潮文庫〉円地文子『源氏物語』一～五（新潮社／昭和）

三、論考の表題は、執筆者が自由に定めるが、サブタイトル（必須）を付すことも含め、内容の暗示ではなく明示を旨とする。

四、論考の冒頭に、キーワードを五語前後掲出する。

五、論考の内容については、制限を設けない。『源氏物語』の先行研究にとられることなく（あるいは無視さえして）、国文学研究者としての執筆者自身の独自の視点・方法・問題意識等により、まったく自由に論述することとする。

この企画の趣旨・眼目はそこにあるので、どうか自由に大胆に論じていただきたい。結果として同趣旨の先行論と重複することがあったとしても、それはその先行論の正当性が別の観点から検証されたことになるのであって、学問的に意味なしとしない。

破天荒な企画ではあったが、難産の末に五四編すべてが勢揃いした。専攻する時代・分野を超えた、専門を異にする国文学研究者による多種多様多様な『源氏物語』論を堪能していただければ幸いである。そして、これを契機に、腕に覚えのある多くの方々による様々な『源氏物語』論が、今後自在に展開されることを期待するものである。

二〇二〇年一月二十八日 最終原稿が到着した日

久保朝孝

目次

はじめに……………久保朝孝 i

桐壺 「人情」は〈近代〉のものか？……………大橋崇行 1

——明治期における『源氏物語』受容と坪内逍遙『小説神髓』……………

帚木 「帚木」における神話的構造……………猪股ときわ 15

——歌の男と歌の女……………

空蟬 近松門左衛門作『大経師昔暦』考……………黒石陽子 29

——空蟬と玉との共通性に着目して見えてくるもの……………

夕顔 源氏十七歳の秋……………近本謙介 41

——交錯する前奏曲preludeと通奏低音basso continuo……………

若紫 行為・出来事の複数性と複合的な話法 重層性・両義性を読む	西田谷洋	55
末摘花 「末摘花」巻にみる換喩的性質について ——異形の姫をとりまく「心もとなき」空間と時間	寺島 徹	67
紅葉賀 芸能的視点による分析と考察 ——舞楽・管弦・催馬楽の描写意図と喜劇的展開	林 和利	77
花宴 源氏物語のわかりやすい授業作りを目指して 教材研究および授業展開の視点から	梅藤仁志	89
葵 車争いにみる主体性 ——供人たちの位相と物の怪	吉田竜也	101
賢木 岩佐又兵衛の源氏絵と絵巻 ——『源氏物語』受容と享受の一樣相	深谷 大	111
花散里 「花散里」から考える江戸の源氏受容 ——『修紫田舎源氏』の成功	津田真弓	125
須磨 須磨の海 院政期から須磨巻を読む	菅野扶美	139
明石 映画の中の明石の君 ——武智鉄二「源氏物語」論	中村ともえ	151
漣標 溺れたい人／溺れたくない人 ——漣標・物語行為としての水先案内	永井聖剛	165
蓬生 リーチ&ショートによってアイロニーを取り出す ——談話分析で読む「蓬生」巻	木股知史	181
関屋 さらにば青年の日の幻影 ——欠如から充足へむかう〈空蟬物語〉	高木 信	195
絵合 「かの浦々の巻」の帰趨 ——藤壺の判歌と光源氏流離譚の終熄	太田真理	207

松風 円地文子『女面』と明石一族の物語 シスターフッドへの想像力……………	鈴木直子 219
薄雲 上田秋成と「薄雲」巻 ——詠源氏物語和歌・源氏物語評論・春秋優劣論——……………	近衛典子 229
朝顔 朝顔の姫君とその物語の造形 ——「朝顔」の由来・「ねびまさる」女君・「ほほゆがむ」——……………	高松寿夫 241
少女 「つくまのの紫」と「つくまえのみくり」 ——古今和歌六帖歌をめぐって——……………	新沢典子 253
玉鬘 ハーレム六条院の完成とその崩壊の予感 ——瑠璃と玉鬘、二つの名を持つ姫君の物語——……………	尾形明子 265
初音 山東京伝の読本『絵本梅花氷裂』と『源氏物語』 ——女性の表象と後妻打ちをめぐって——……………	山名順子 281
胡蝶 「胡蝶」における庭園と光源氏のセクシュアリティについて ——感性と美学、ビオスとゾーエー……………	水川敬章 295
蛍 蛍の光は何を照らし出したか ——語りの批評性と玉鬘の物語(論)——……………	安西晋二 309
常夏 近江の君 ——その登場の背景と影響をめぐって——……………	徳竹由明 321
篝火 柏木の和琴、玉鬘の和琴 ——篝火巻における司馬相如伝の典拠を起点に——……………	山本大介 333
野分 「あくがる」の訳をめぐる一考察 ——円地文子訳の深層としての六条御息所……………	増田祐希 349
行幸 現代文学としての源氏物語 ——玉鬘・末摘花・近江の君のストーリー……………	都築春彦 363

藤 袴	光源氏と夕霧——父と息子の対決——	佐藤綾佳	377
真木柱	「心もてあらぬ」結婚と玉鬘の〈場所〉 ——六条院、鬚黒家——	二瓶浩明	389
梅 枝	アクティブ・ラーニングを取り入れた源氏物語の授業構想 ——薫物合わせ、贈答歌の体験を通じた主体的な学び——	小塩卓哉	401
藤裏葉	近世版本の挿絵に描かれた「藤裏葉」巻 ——巻を象徴する図様——	菊池庸介	411
若菜上	『若菜上』を読む——方法論の視座から——	柳瀬善治	425
若菜下	やんごとなき人々の葛藤 ——女房革命が暴くもの——	篠崎美生子	439
柏 木	柏木と女三の宮の贈答——歌の論理と散文の論理——	大浦誠士	449
横 笛	『源氏物語』と『伊勢物語』二十三段 ——雲居雁をめぐって——	高野奈未	461
鈴 虫	「おなじ」ものと「かはれる」もの ——鈴虫巻を流れる時間——	坂 堅 太	471
夕 霧	猿樂的世界の魅力 夕霧の恋の喜劇性	植木朝子	481
御 法	高校生と御法巻を全部読む ——興味・関心を高める授業づくりの提案——	小崎早苗	495
幻	光源氏と世之介 ——「幻」巻と西鶴『好色一代男』最終章の比較から——	佐伯孝弘	505
匂 宮	第二世代から第三世代へ ——「伏線」と「照応」の視点から——	光延真哉	519

紅梅 「さかしら」がる紅梅と真木柱 —— 桐壺帝の孫娘を求める匂宮との関係 ——	高橋 広満	533
竹河 草子地と語り手／書き手の戦略 —— 与謝野源氏と谷崎源氏の比較を通して ——	吉田 司雄	545
橋姫 中世人は「橋姫」をどう読んだのか 伊行・定家を勝手に越えていった素寂・範政・兼良の源氏学	前田 雅之	559
椎本 椎の木が想起させるもの —— 歌・物語・俳諧をつないで ——	早川 由美	575
総角 零度のコミュニケーション —— 枯れ行く大君・人形 <small>ラプトル</small> を愛する薫 ——	田中 貴子	591
早蕨 早蕨巻の時間意識 —— 回帰する時間・直進する時間 ——	木下 華子	603
宿木 光源氏と薫 —— 「聖」と「俗」の引力 ——	長濱 拓磨	615
東屋 へうすらぼんやり姫〈浮舟の物語始動 —— 『源氏物語』の女君たちの〈人形 <small>ひとがた</small> 〉か？ ——	高田 晴美	629
浮舟 浮舟の憂悶 —— 死へ向かうおんな ——	影山 尚之	641
蜻蛉 薫の喪（他者）への哀惜の帰趨するところ	竹内 瑞穂	653
手習 終焉の予感 —— 周縁ゆえの内面の自律 ——	高橋 龍夫	665
夢浮橋 『源氏物語』の終わりかた —— 認知バイアスの分析から ——	野中 哲照	677
おわりに	久保 朝孝	693
執筆者紹介		695

*本書では第三巻の巻名およびそのヒロイン名表記を、通行の「空蟬」でなく「空蟬」を用いている。